

レディ・トラベラー

イザベラ・バードの成長と軌跡

——“Unbeaten Tracks in Japan¹⁾” 出版前後まで ——

大 野 純 子

1. はじめに — ジェイン・オースティンの「孫」

英国人旅行作家イザベラ・バード（1831-1904）と小説家ジェイン・オースティン（1775-1817）は、共にアッパーミドルクラスの出身で、生年は半世紀強の差がある。オースティンは、生涯のほとんどを実家で過ごし、世間には小説を書いていることを伏せたまま、1810年代に「家庭を自身の『世界』とせざるを得ない」女性群像を次々と世に送り出した。兩人に共通しているのは、父親が牧師であったこと、両親が当時としてはかなり熱心に娘の教育環境を整えたこと、姉妹の仲がよく、成人してもなお、多くの手紙を取り交わしあったことである。

文学的な「オースティンの娘たち²⁾」ではなく、オースティンの生み出した小説のヒロインをここで「娘」とするなら、バードは年齢的には小説の主人公の子ども世代、つまり、オースティンにとっての孫世代にあたる。その境遇はオースティンと比較するといかにも現代っ子である。父は娘の視野を広げるため、資金を出して米国旅行をさせ、宗教の状況について報告書を書くことを望んだ。体面を保つための結婚を強要した形跡は感じられず、実際にはその遺産でバードと、その妹の生活を支えてくれた。

しかし、バードがオースティンより社会的に自由であったかという点、そうではない。若い時の彼女の移動の自由は、たまたま父親が先進的であったからだ。全般的な社会背景はむしろ逆であった。17世紀から女性が細々と

してきた小さなビジネスは、英国経済の発展と共に、経営の才能を持った男性が牛耳る、近代的な組織に吸収されていった。19世紀の英国は繁栄のただ中にあり、国内はもとより、植民地の拡大に伴う国外のポストも用意され、能力ある男性は体が二つあっても足りない状況であった。そのため、女性は家庭を男性の安息の場にする役目「家庭の天使」になることを、これまで以上に期待されたのである。

華やかで自由奔放な国王ジョージIVの「リージェンシー（摂政時代。一般に1811～1830年を指す）」に、オースティンは小説中に享乐的、放縦な人物や、私生児を自由に登場させていた。その後、ウィリアムIVの短い治世を経て、1837年にヴィクトリアが即位してから10年もしないうちに、女王の生真面目で保守的な性格が、社会全般に影響を及ぼすようになった。ヴィクトリア朝中期に達する頃には、その資質が世相にことごとく反映され、少なくともミドルクラス以上の階層は、道徳的であるか否かを常に問題にし、社会階級のはしごを一段登るために、上品さを過度に追求した。

バードは若い時から病弱で³⁾、成人後はソファで寝たり起きたりして体を休めながら、慈善活動と、限られた範囲内での社交を行っていた。職を得るという選択は必要もなかったし、望んでもいなかった。アッパーミドル以上の若い女性の中には、社会全体の堅苦しさに押され、原因不明で病む者が見られたに違いない。しかし彼女たちは結局サイレント・マジョリティであった。結婚できればできたで、不調を押して家政管理、社交の義務を果たし、結婚できなければ、父または兄の庇護と管理の下、遠慮して暮らしていた。

バードは父が企画してくれた初の外国旅行の経験を通じ、自分の勇氣、聡明さ、判断力を初めて知り、一時的にせよ、英国社会の閉塞から逸脱できることに気がついた。病気の原因が一概に肉体的なものから来るのではないとわかったのは、旅行という手段を通して自己実現をした結果である。彼女は没後、エディンバラの医学雑誌で「故国では弱々しく、海外ではサムソンのように勇ましい」と論評された（チェックランド1995 p.249）。妙なことだが、これは事実である。

2. レディ・トラベラーの出現

新大陸発見の時代から数世紀を過ぎ、男性探検家が数百年も世界各地で活躍した結果、ヴィクトリア朝時代には世界の高山、滝、湖などはほぼ「発見」し尽くされていた。しかし、しかるべき場所に行けば、動植物の新種発見、先住民族の風習の紹介といったさまざまな「発見」の余地は、まだまだあった。

かつて探検記の作者は男性のみであったが 19 世紀になると、夫の赴任にしたがって帝国の植民地に移り住み、私信として見聞記を書く女性が増えてきた。また、宣教師としてアフリカに赴任し、その記録を残した女性もいた。マリアンヌ・ノース (1830-1890) は植物画を描きたいがために、ロンドンの町を歩くのと同じく変わらない服装のまま、世界の大陸を訪ね歩いた。家の暖炉 (安らげる家庭の象徴) の前を離れることができないヴィクトリアンの中・上流階級の女性にとって、そのようなレディ・トラベラーは女性の勇気と聡明さを体現する存在であり、自分たちが考えられない所に行き、考えられないことをする夢のヒロインでもあった。

レディ・トラベラーの中で、後世に最も名を残しているのがイザベラ・バードである。彼女が当時のヴィクトリアン女性として、数々の束縛を受けながら生きていたことは確かであるが、彼女はそこから逃げるためだけに旅行を繰り返したのではない。もしそうなら、彼女は完全に外国に移住していたであろう。バードにとって自己実現と解放は、旅の終わりに故国に戻るからこそ、実感されるものだった。

3. 旅行作家としてのキャリアの確立 —— 旅行先の決定とその背景

当時の大英帝国の国民にとって植民地との精神的垣根は低く、「国内」という感覚は簡単に世界各地に拡散した。すでに 40 代半ばに達していたバードは、それまでに米国、カナダ、オーストラリア、サンドウィッチ諸島 (現ハワイ) を旅し、報告書、旅行記を世に出していた。地名を見ればわかるよ

うに、それまでに旅した土地は、英国人にとって行きやすいという基準で選択されている。しかし、彼女が旅行作家としての名を完全に確立したければ、英語の通じる国・地域、キリスト文化から離れるべき時が来ていた。バードは有名人願望があったわけではなく、皆にちやほやされたいと思う性格でもなかったが、次の旅行記を書くことによって、名実ともに落ち着いた社会的地位を求めていたのは事実である。

3.1. 慎重に考慮すべきだった「宣教との関わり」

彼女の2回目の米国旅行は、宣教活動のレポートの意味合いを持っていたが、バードは新たな旅行先では、そのテーマは捨てるつもりだった。それゆえ、今回は多くの英国人が宣教活動をしていたインド、アフリカ大陸には行きたくなかった。そのどちらかに行けば、その旅行に宣教の側面を求められかねず、また万が一、宣教団の行動を批判したら⁴⁾旅行中はもちろん、帰国後も厄介な問題になることは明らかだったからだ。

バードはそれまでの旅行中に、キリスト教内部の宗派争いも見聞きしていた。宣教師の中には現地民の慣習に理解を示す者もいたが、それは常に教団内の問題の種になっていた。初来日前後のバードは、このような理由で宣教についてはできるだけ無関心を装いたかったのである⁵⁾。

3.2. 異文化に対する寛容性

バードは異教、異教徒に関して寛容な面もある。その態度は20世紀的な「文化的多様性の容認」から来るものではない。バードがなぜ寛容な面を持っていたのか、以下の理由が考えられる。

まず、彼女は幼少時に、父親の信仰上の挫折を見たからだ。牧師である父親は教区の信徒に「安息日の厳守」という正論を訴えたにもかかわらず、彼らの反発を受け、失意のうちに死に至った。そのため、彼女は現実主義者になり、理想と現実とは異なるといった諦念から、宣教を無条件に完全な善であると認められなくなった。そこで国外においては彼女は単に、「未開人がキリスト教に改宗しないまでも、それを知ることによって勤勉になり、節酒に努めていること」「一夫一婦制を守り、前よりいい家に住み、生まれてきた

子供を貧困のために殺さなくなったこと」を喜んだ。

バードの寛容性には ヴィクトリア女王の影響も考えられる。女王はインドの異宗教に寛大な態度をとり、拡大する帝国経営をうまくこなすばかりでなく、慈悲深い「帝国の母」というイメージを形成しつつあった。バードはヴィクトリアンの一人として当然、女王の言動に自然に影響を受けていたと思われる。

3.3. 次の旅行先は「新奇」であることが求められた

バードが最初に考えた行き先は南米であった。その理由の一つに、乗馬がある。彼女は異国で久しぶりに乗馬を満喫し、南米でも同様の経験をしたいという期待があった。彼女は子ども時代、乗馬を好んだが、成長につれて当時の常識に従い、女性用のサイド・サドル⁶⁾を用いざるを得なかった。ところが、サンドウィッチ諸島でも米国でも、現地の女性がごくふつうに従来の鞍にまたがっているのを見て、それを恐る恐る真似し、忘れていた乗馬の楽しみを思い出したのである。

バードは旅行先について、出版社の社長ジョン・マレーⅢと、その紹介によるチャールズ・ダーウィンに相談した。ダーウィンは当時、70歳近い有名な学者であり、社会思想面では進歩的で、奴隷制度に反対し、人種差別にも批判的だった。しかし、性差別については当時の男性に共通して見られる考えを若い時から持っており、「心地よい暖炉のそばに優しく穏やかな妻がいるのは、(男性の)健康によい。結婚に価値があるとしたらそういうことだ」と考えていた。60代になってからも著書に「女性は直感、すばやい認知、模倣の能力で、男性より優れている面があるが、そのような能力の一部は野蛮な人種が特徴としているものである」(ダーウィン 2000: p.399 原著 1871)と書いている。ダーウィンは同書の中で北海道アイヌにも言及しているが、アイヌと出会ったことはなかった。彼が女性であるバードにアドバイスを与える気になったのは、この風変わりな中年婦人が、単身で「未開の地」に乗り込もうとしている気迫に打たれたからかもしれない。

日本は明治維新からわずか10年余であったが、ダーウィンのような知識層にはすでに「アジアの新興国」として認識されていた。江戸時代末期から

公務、または商務で日本を訪れた欧米人が、日本が恐るべきスピードで西洋化を進めていること、一見に値する日光や富士山、京都の伝統美、美術品の製造技術が極めて高いレベルにあること等についてさまざまな書を著していた。純粋に観光のために日本に赴く西洋人は、まだほとんどいなかったものの、商人はヨーロッパにないものを求めて、すでに活発な活動を始めていた。

バードは“Unbeaten Tracks in Japan”の「はしがき」に、日本に行くことを決めた後に、周辺の議員、軍人などから聞いた誤解、質問を列挙している。曰く「日本はロシアに属しているのか」「日本は島ではなく大陸の一部である」「日本の奴隷制度は廃止されそうか」などであるが、新奇な土地を求めるといことであれば、ちょうどよい知名度であろう。日本には奴隷制度がないのもよかった。バード自身は奴隷制を容認する立場ではなかったが、反対運動に身を投じる意志はなかった。また、日本の宣教についても、他の地域と異なり、目立った成果がないため、少なくとも巻き込まれる心配は少なかった。

3.4. 先住民族への関心

バードは、当時のヨーロッパ人がもてはやすジャポニズムの国の日本に関心を持ち、次にそこに住むアイヌを知ったのか。それともアイヌという先住民族が住む国として「日本」に初めて関心を持ったのか。それは定かではないが、どちらの可能性も存在する。1851年と1862年にロンドンで行われた2回の万博で、日本の事物は人々の注目を集め、芸術家は争って「日本風」を採り入れていた。

その頃、ヨーロッパ、特にドイツでは P.F.v. シーボルトを中心とする「アイヌ＝白人説」を信奉する研究者グループがあった。「アイヌは白人の先祖だ」と信じる人類学者らは、この説を実証するためアイヌの頭蓋骨を調べ、1865年には英国領事館員による遺骨盗難事件まで起こしている。バードはこれらの件を知っていた。

彼女は若い時から先住民族への関心を持っていた。そして各地の宣教団が苦勞しつつ、インディアン、アボリジニ、ポリネシア系先住民に宗教と西洋の価値観を広めているのを見ている。バードの見た先住民族は過激な形にしる、比較的穏健な形にしる、白人に征服されかかっていた。彼女は米

国では、人を介して彼らとの接触を試みるが、安全面から実現しなかった。

日本に行けば、先住民族と初めて接することができそうだと。彼らは米国のインディアンと異なり、日本人⁷⁾と全面的な敵対状態にあるわけではない。しかも日本人は西洋人ではないから、これもまた初めて、白人以外に征服されつつある先住民族に接することができる。アイヌという自分たちの先祖につながっているらしい民族に会いに行くというのは、魅力的であった。

3.5. アイヌに対する基本的スタンス

バードは、実際にアイヌ居住地で調査を行い、眼前に見るアイヌ一人一人の美点をたびたび書きたてているが、その一方、アイヌ全体の運命については次のように考えていた。

生来進歩というものと無縁な悪意のない人々は、征服された名もなき民族をあまねく受け入れてきた広漠たる墓場へと向かい始めているのである。(金坂訳 vol.3 p.69)

言葉を失った民族、生活の手段を失った民族の行き着くところは墓場である。そこに行く前に彼らはキリストの力によって生まれ変わるかもしれないのである。

バードはそれまで、一度も征服民族の非難をしたことがない。先住民族の伝統文化が失われるのは惜しいと思っても、それは「私個人」が惜しむものであり、教化は彼らの人生の質の向上につながると考えていた。大英帝国の臣民、敬虔な国教徒であるバードの根底には、選民思想に通ずるこのような考えがあり、その前提の上にアイヌへの称賛、同感があった。「同感」という心的態度は、バードの前後にアイヌ居住地を訪れた白人の男性には見られない。彼らは民族としてのアイヌについては知りたがったが、個々のアイヌと向き合おうとはしなかった。ダーウィン流に解釈すれば、バードは女性であるからこそ、アイヌに同感できた。いずれにしろ、バードのその基本的態度によって、アイヌは胸襟を開いてくれ、彼女のアイヌ調査は成功した。

3.6. ジョン・マレー社とヴィクトリア朝後期の出版界

バードの著書は、初期から一貫してジョン・マレー社（以下、マレー社）

から出版されている。同社はジョン・マレー I が 1768 年に設立した出版社で、バードの時代にはジョン・マレー III が経営者であった。英国はドイツより造本・印刷技術の面で遅れをとっていたが、1880 年前後から印刷技術も高まり、質のよい本が作れるようになっていた。また、ヴィクトリア朝後期は識字率もますます上がり、経済的繁栄の恩恵を受けて、使用人を雇用できるようになったミドルクラスの女性が、「上品な暇つぶし」のために趣味として読書をする習慣が生まれていた。オースティンの時代には、貴族が装飾のために買う豪華本と、貸本が主流であったが、ヴィクトリア朝後期にはミドルクラスの人たちが自分で本を購入して読むようにもなっている。マレー社は、鉄道の駅に置く安価な「鉄道文庫」でも成功していた。

マレー III は社会の変化とニーズを読む才があり、この繁栄の時代には旅行記と科学ものが求められることを見越していた。同社はそれまでにリヴィングストン、ダーウィンなどの探検ものも出版して世間に話題を提供していた。経営者としてのマレー III は今後、探検分野の出版をより充実させたいと考えており、ロビンソン・クルーソーやガリヴァーの「大発見」や「大移動」とは正反対の、これまでに見られないきめ細かな内容の原稿を求めている。

3.7. 編集者マレー III とバード

マレー III はビジネス一点張りの人ではなく、慈愛あふれる人格者の面もあった。彼にとってバードは、年の割に世間知らずかと思うと、旅行記では剛胆な筆の冴えを見せる存在で、彼女を自社の看板旅行作家に仕立て上げることはおおいにやりがいのある仕事であったろう。結論を先に述べれば、1880 年に出版された “Unbeaten Tracks in Japan” は短期間に何回も版を重ねた。同社は 1985 年に分量を半分にした「簡略本」も出版している。その前年にアーネスト・サトウ主編による “A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan” 改訂版も出しているので、これらの本はお互いの相乗効果で、売り上げを一層伸ばしたに違いない。オースティンの生涯年収がやっと父親の年収と同程度の 700 ポンド弱であった⁸⁾ (ハイリー 1986 p.37) のと比較して、バードは後年、印税で外国に慈善病院、孤児院を設立し、それでもなお、亡くなる時に約 20,000 ポンドの遺産を残してい

る。(チェックランド 1995 p.232)

マレー社から出された“Unbeaten Tracks in Japan”はバードが実妹ヘンリエッタに宛てた書簡形式をとっている。バードはこれまで、手紙や日記を元に帰国後、本にまとめたことはあったが、本自体を書簡方式にすることは、バードのアイディアではなかったようだ。なぜなら、彼女は「はしがき」で、この件について多少の不満を述べているからだ。とすると、これは世間を知るマレーⅢのアイディアであると考えられる。この時代に、女性が男性の牛耳る分野をあれこれ批評することは、それだけで反発される可能性が高かった。しかし、病弱な姉が旅行で見聞したことを、同じく病弱な妹の慰めになるように私信をしたためたというのであれば、批判しにくくなるからだ。

マレーⅢがもう少し功利的な人物であれば、旅行中に記事を随時英国に送らせ、不定期連載物として雑誌に掲載しただろう。レディ・トラベラーとして、すでに名が知られていたバードなら、その資格があり、当時の日本の郵便事情も辛うじてそれを可能にしていた。そうすれば、雑誌も売れるし、本も売れる。しかし、マレーⅢは少なくとも日本旅行の時点では、その方式をとらなかった。その理由は、4.で詳しく述べるが、マレーⅢはバードという人間を充分知っていて、一時の金儲けのために彼女を傷つけようと思わなかったからである。

3.8. 情報収集

旅行先を決めたバードは情報の渉猟に努めた。3.3で述べたように「お雇い外国人」、宣教師等が書いた日本関係の著書はすでに存在していたので、それらの文献はおそらく読んだであろう。彼女はかなり以前から旅行に役立つように植物の勉強をしていた。当時の英国では、世界各地に赴いて珍しい植物を探すプラントハンターが活躍しており、バードは彼らの日本での成果も承知していたと思われる。

彼女は本の「はしがき」に参考資料として「日本アジア協会 (The Asiatic Society of Japan)」の紀要 (Transactions of the Asiatic Society of Japan) と、「ドイツ東アジア自然民族学協会」の紀要をあげている⁹⁾。「日本アジア協会」は日本在住の英国人が中心になって 1872 年に創設した日本初の学会であ

る。紀要の第2巻（1873.10.22～1874.7.15）所収、英国海軍のブリッジフォードによる‘A Journey in Yezo’（「エゾ紀行」）という論文は、軍人らしい淡々とした文章で地理、交通事情、植生、産物（鮭、麻など）について見聞が記されている。彼は道内の何か所かでアイヌにも出会っており、多少の記述がある。全体として形容詞、特に感情形容詞が少ない無機質な文章だが、当時、北海道を訪れたいと願っている西洋人には貴重な文献であった。バードもこの文章を読み、まだ見ぬ土地とそこにいる先住民との邂逅を夢みただろう。そして、「私ならこの百倍も人を魅了する文章を書ける」と思ったに違いない。

4. 希望した「新奇な国」に来て、 なぜバードは日本を辛辣な口調で語ったのか

4.1. バードの生来の性格

バードは確かに、ダーウィンの指摘する女性の優れた特質である「直感」「すばやい認知」について特筆すべき能力を持っていたが、それは女性であるがためではなく、バード個人の特質である。彼女は目で見える事象を臨場感を持って表現し、そこに持てる知識で分析を加え、読者に供することができた。

しかし、バードは公の報告をするには不適格な性格である¹⁰⁾。マレーⅢの息子、マレーⅣはバードの本質を次のように冷静に分析している。「彼女はまっ正直な人でしたが、思いこみが激しく、あえて言えば、物事を誇張してとらえる、という生来の資質がありました。この資質を持った人にはほかに何人かお目にかかっていますが、心に描いたことを実際にあったように話す、すなわち、話を脚色するのです。以前から気づいていました。それは彼女の性格を記す際に、たとえ明言はしないにしても、心にとどめておくべき資質です（チェックランド 1995 p.80）」。マレーⅣは、若い時からバードと父の仕事ぶりを見てきてこのように感じたのだろう。彼の意見の是非に正解はないが、バードは自由を求めて国外に出たのだから、見聞の自由、表現の自由を最大限与えられるべきだろう。著作のある箇所に創作の疑いがあれば、

個々に判断すればよいことで、それがバードの著作の価値全体を損ねることにはならない。

4.2. 絶賛と酷評

バードは著書で、東北の美しい自然を手放して賛美し、誠実な車夫をほめ、泊まった宿に気が利く主人がいればそれも書き残し、信頼できる通訳兼従者となったイトーについて称賛する時もある。しかし、それ以上に東北の宿の不潔さ、人々の迷信深さと無知、貧しさについて筆を費やし、微に入り細に入り例をあげている。

現地の生活環境が、今では考えられないほど悪かったのは確かに事実である。では、英国の同時代はどうだったのか。当時、鉱山では少女が半裸で坑道に潜って働いていた（ハイリー 1986 p.93）。貴族の家の下級男性使用人には、ベッドも与えられず、台所の片隅に寝ていた者もいた。辛うじてベッドをもらっていたメイドは、主人のベッドは風を当てて叩いても、自分のベッドを清潔に保つ時間はなかった。

そこから判断すると、英国と日本に大差があるとは思えない。彼女は父親の職業柄、中・下流階級の人々の生活について日常的に見聞きしていた。30代の時には、エディンバラの貧困者居住地域について調査をし、報告書を出版している。ところが、そのバードは日本の劣悪な生活環境に接して、深窓の令嬢のように驚いている。そして、辛くみじめな境遇を甘受するしかない人間の現在のもとより、未来までも否定することもあった。

この日本旅行ではバードに新たな心理的負担が生じていた。それは、今まで「見る人」であったバードが日本に来たとたん、「見られる人」になってしまったことである。これまでの旅行地には、多くの白人がすでに居住していたから、バードは外見上はその一員に過ぎなかった。ところが日本に来てみると、様相は一変し、彼女は初めて西洋人を見る、日本人のぶしつけな視線に取り囲まれた。彼女は博物館の陳列品でさえなく、まさにロンドンの見世物小屋の出し物であった。見に来た主体のはずの自分が、見られる客体になってしまったという予想外の展開は、バードの神経を痛めつけた。「西洋人の女性」を見るために、障子に穴を開けて何時間ものぞいたり、隣の建物

の屋根に上がって落ちるという野次馬の愚かな行動への不快感は、バードの筆致をますますマイナス方向に向かわせた¹¹⁾。

旅が進み、いよいよ北海道のアイヌ居住地に入ると、バードはアイヌと日本人とのさまざまな違いを感じた。まず何よりも彼らはバードをぶしつけに注視しなかった。当時の複数の西洋人が書き残しているように、アイヌの容貌は西洋人に近かった。彼女はこれまであげてきた日本人の体格の貧弱さと、対比させるかのようにアイヌの体格、顔を誉めあげ、挨拶のしかた、言葉の響きを 'graceful' とたびたび表現している¹²⁾。当時の英国の読者は「高貴なる野蛮人」のイメージが眼前に浮かぶ思いだっただろう。バードが意図したわけではなくても、この対比がこの本のわかりやすい魅力になっている。

4.3. 卑俗な毒

マレーIVも看破しているように、バードは筆が滑るタイプの書き手である。良いことにも悪いことにも、その傾向がある。バードがかつてオーストラリアの人々の欠点を容赦なく書いた時、彼らの多くは英国から来た人たちであるから、すぐその本を読む機会があるということがわかりそうなものの、バードはいっさい意に介さなかった。マレーIII、またはもしかしたら妹にも忠告されて、旅行を重ねるに従い、少しずつその態度は修正されている。ただし、悪口に気を遣うようになったのは欧米人に関してだけである。

罪もない人の外見について悪く言うのは、ほめられる所行ではないが、バードは非キリスト文化圏に出れば、遠慮なくこれをする。たとえば、バードは参観した秋田県師範学校の校長と教頭2名の実名をあげて「私の来訪を歓迎してくれたが、洋服を着ているために人間というよりはまるで猿のようだった」（金坂訳 vol.2: p.141）と述べている。彼らは西洋人バードの来校に敬意を表して、着慣れぬ背広を着用したのだろう。また、バードの旅を支えてくれた通訳兼従者イトーに彼女は心から感謝しているが、初対面時の彼の顔つき、体つきに関する描写は容赦ない毒舌に満ちている。彼女は帰国後、少なからぬ時間をかけて、本の手稿をまとめ上げているが、その時も修正の必要を感じなかったと見える。知的な人が書いたはずの本に、このように時々、大英帝国の臣民のプライドを満たす卑俗な毒が入っているので、当時の英国読者は快いのである。

5. おわりに

—“Unbeaten Tracks in Japan” 出版当時の享受

この本が出版された 1880 年はヴィクトリア朝中期の終わり、もしくは後期の始まりの時期にあたり、ヴィクトリア時代の風潮が最も典型的に見られる時代であった。この本の成功は、現在は見過ごされがちなことだが、バードが当時の社会規範を守ったことがまず前提にある。彼女はヴィクトリアンの女性としての枠をたまには外したものの、基本的にはその枠の中で行動し、考えた。女性であることは社会的に不利ではあったが、民衆の憎悪の対象にはなりにくく、日本人の女性、アイヌの女性とも深く接することができるなど有利に働いた点もあった。また、彼女にスポンサーがいなかったことも読者に広く受け入れられる要素になった。

また、この書は人々の知的要求を理解つつも、「適度に」知的であることに留まっている。そのために、子ども時代から読書の習慣があったわけではない人を読者にできた。バードは彼らが一生行かないであろう訪問先の文化、習慣、人物について広く浅く述べているが、専門家として一つのことに深く踏み込んではいない。彼女の望みは、学者あるいは思想家になることではなく、自分自身の興味を満足させながら、同時に英国民の知的向上に役立つことであった。マレーⅢが意識していたように、ヴィクトリアンは科学好きであり、国外の目新しい事物の見聞を望んでいた。彼らは最もふさわしい時期にこの本を出版した。その後も彼女が生涯にわたって過酷な旅を続けたのは、著作を増やすうちに、自分の使命を知り、そこでの自己表現が彼女の生きがいになったからだ。“Unbeaten tracks in Japan” はその記念すべきマイルストーンとなったのである。

註

- 1) 副題は“～: An Account of Travels in the Interior, Including Visits to the Aborigines of Yezo and the Shrines of Nikkô and Isé”。英国での初版は 1880 年だが、日本では長い間知られざる存在だった。1969 年に 1911 年版の北海道旅行に関する部分のみが神成利男訳（訳題『日本の

知られざる辺境 北海道篇』)で出されているが、150部の限定版ということもあり、多くの人の目に触れたわけではない。

初版出版後90年以上経た1973年に、簡略本[1885年]の翻訳が高梨健吉訳(『日本奥地紀行』)で出版されている。その後、2008年に1880年初版本に基づく時岡敬子訳(『イザベラ・バードの日本紀行』)全2巻が出版された。そして2012～13年に、同じく1880年版を翻訳した金坂清則訳(『完訳 日本奥地紀行』)全4巻が出版されている。本稿は1880年前後のイザベラ・バードの状況を考察するものなので、出版年数に隔たりのある日本語の訳題を示さず、原題(副題は省略)を用いた。日本語訳は金坂『完訳 日本奥地紀行』を用いた。

- 2) 英文学史上、そのようなたとえ方がある。川本静子はS・ブロンテ、ギャスケル夫人などを「娘」としてあげている。
- 3) バードは先天的に背中を痛めていた。
- 4) 後年の例だが、レディ・トラベラーの一人メアリ・キングズリ(1862～1900)は西アフリカで宣教者たちを「ヨーロッパの価値観をやみくもに押しつける」と批判したため、彼らと激しくぶつかった。
- 5) 後には考えを変え、朝鮮旅行以降はもともと興味のあった医療伝道を表に出し、宣教団とも深く交わるようになった。その頃には旅行作家としてのキャリアが確立し、宣教団との関わり方も体験的に覚えたからであろう。
- 6) 当時、リスpekタブルな女性がズボンをはくことは考えられなかった。スカートのままで馬に乗るために考案されたのがこの鞍で、馬の片側に両足をそろえて乗馬する。この「片鞍乗り」の姿勢は上半身がねじ曲がるため、特にバードのように背中が悪い女性には苦痛を与えた。
- 7) ここでは「和人」という語を使うべきだが、バード訪問当時のアイヌには「自分たちは日本人である」という帰属意識がなかったと判断し、本稿では以降も「日本人／アイヌ」という分類の上、この語を使用する。
- 8) この差の主因は、時代による物価の差異より、彼女たちが存命時にビジネスとしての著述業に成功したか否かによる。『欲ばりな女たち—近現代イギリス女性史論集』には、オースティンとほぼ同時代の女性ライター

で、オースティンの何倍もの収入を得ている女性の例が数多くあげられている。(同書 p.37 ~ 38)

- 9) ただし、バードは両誌の名前を安易に合体させて記述している。詳しくは金坂訳 第1巻 p.249 参照
- 10) バードの生涯にわたる旅行のうち、特に朝鮮とペルシャ・アルメニアでは、当時の政治状況から英国のための情報収集が求められた。バードの行動は英国の関係者を満足させたが、性格の他にも年齢、性別を考えると彼女が最適任であったのかは疑問である。
- 11) バードの来日の数年前までは外国人襲撃事件が起きており、彼女はもちろんそのことについて承知している。彼女が女性であることと、旧武士階級の少ない農村地帯を回ったこと、一部の西洋人のような不遜な態度をとらなかったことは、野次馬をつけ上げさせることになったが、一方、よい結果も生んだ。一部の人は、バードの人となりに親しみを感じて彼女の質問に快く答え、また、気配りもしてくれた。彼女もたまには野次馬の興味を満たすように、イトーを介して彼らの質問に答えたりしている。
- 12) バードは、関西と伊勢方面の旅では上流階級に属する日本人とたびたび接しているが、彼らの様子について、ここまでは絶賛していない。

謝辞

論文作成のための資料収集にあたり、大正大学図書館に大変お世話になりました。ここに記して感謝いたします。

参考文献（原著と邦訳の出版年が大きく異なる場合は原著名等も記載した）

- 新井潤美 2010『ジェイン・オースティンとイギリス文化』日本放送出版協会
- 伊藤航多・佐藤繭香・菅靖子 2013『欲ばりな女たち——近現代イギリス女性史論集』彩流社
- 井野瀬久美恵 1998『女たちの大英帝国』講談社
- オールティック、リチャード・D 1998『ヴィクトリア朝の人と思想』栗田圭治他訳 音羽書房鶴見書店

- 金坂清則 1994 『J. ビショップ夫人の揚子江流域紀行——イザベラ・バード論のための基礎作業としての旅行記の部分訳を中心に——』『研究集録 人文・社会科学（大阪大学教養部）』第42輯 大阪大学教養部
- _____. 2014 『イザベラ・バードの旅の世界』平凡社
- _____. 2014 『イザベラ・バードと日本の旅』平凡社
- 川本静子 1984 『ジェイン・オースティンと娘たち——イギリス風俗小説論——』研究社出版
- 川本静子・松村晶家編著 2006 『ヴィクトリア女王——ジェンダー・王権・表象』ミネルヴァ書房
- 木下卓 2011 『旅と大英帝国の文化 越境する文学』ミネルヴァ書房
- 楠家重敏 1997 『日本アジア協会の研究』日本図書刊行会
- _____. 1995 「日本アジア協会の知的波紋」『杏林大学外国語学部紀要』vol.7 杏林大学外国語学部
- 要田圭治・大嶋浩・田中孝信 1998 『ヴィクトリア朝の人と思想』音羽書房鶴見書店
- 小林司・東山あかね 2001 『シャーロック・ホームズの推理博物館』河出書房新社
- 坂井妙子 2013 『レディーの赤面 ヴィクトリア朝社会と化粧文化』勁草書房
- サトウ、アーネスト編著 1996 『明治日本旅行案内』上下巻 庄田元男 訳 平凡社 原著 1884 “A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan” second edition, revised. John Murray London
- 庄田元男 1990 『山書研究』35 日本山書の会
- 谷田博幸 2001 『図説 ヴィクトリア朝百科事典』河出書房
- ダーウィン、R. チャールズ 2000 『ダーウィン著作集2 人間の進化と性淘汰』長谷川眞理子訳 文一総合出版 原著 1871 “The Descent of Man and Selection in Relation to Sex” John Murray London
- チェックランド、オリープ 1995 『イザベラ・バード 旅の生涯』川勝貴美訳 日本経済評論社
- 出利葉浩司・田村将人 2011 『千島・樺太・北海道 アイヌのくらし——

- ドイツコレクションを中心に——』の企画に携わって」開拓記念館だより vol.41-2
- ハイリー、マイケル 1986『誰がズボンをはくべきか』神保登代訳 ユニテ
バー、パット 2013『イザベラ・バード 旅に生きた英国婦人』小野崎昌
裕訳 講談社
- バード、イザベラ 1969『日本の知られざる辺境 北海道篇』神成利男訳
郷土研究社
- _____. 2008『イザベラ・バードの日本紀行』上・下 時岡恵
子訳 講談社
- _____. 2012～2013『完訳 日本奥地紀行』1～4 金坂清
則訳 平凡社
- ミドルトン、ドロシー 2002『世界を旅した女性たち ヴィクトリア
朝』佐藤知津子訳 八坂書房 原著 1965 “Victorian Lady Travellers”
Routledge and Kegan Paul, London
- 山田泰司 1977『ヴィクトリア朝中期の社会覚書』『一橋論叢』vol.75-5
一橋大学
- Bird, Isabella L. 1880 “Unbeaten Tracks in Japan: An Account of Travels in
the Interior Including Visits to the Aborigines of Yezo and the Shrines
of Nikkô and Isé” vol.1,2 John Murray, London
- Bridgford, R. M. A 1964 ‘A Journey in Yezo, during the Months of August,
September and October 1873: With a description of the old Western
route to Satsporo, the Ishikari river, and the new road from Satsporo to
Endermo bay”Transactions of the Asiatic Society of Japan” from 22nd
October, 1873 to 15th July, 1874. 1874; reprint, Yushodo Booksellers
- Darwin, Charles 1987 “The Correspondence of Charles Darwin” vol.2
Cambridge University Press, London
- Stoddart, Anna M. 2000 “The Life of Isabella Bird” 景仁文化社, 韓国 1907;
reprint, John Murray London